九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄庭堅詩歌言語研究

蒙, 顕鵬

https://hdl.handle.net/2324/1959063

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式３）

氏　　名　：蒙　顕鵬

論 文 名　：黄庭堅詩歌言語研究

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

この学位請求論文は、中国北宋時代の文人として著名な黄庭堅（1045～1105）の詩歌についての考察をまとめたものである。黄庭堅は、同時代の王安石（1021～1086）や蘇軾（1037～1101）とともに北宋を代表する詩人として知られる。また後世の南宋に至り、彼を師と仰ぐ江西詩派（黄庭堅の故郷が江西であったことによる）と呼ばれる詩人群が形成されたり、日本では鎌倉時代後期から室町時代にかけて活躍した所謂「五山僧」たちによって大いに愛読され、「東坡、山谷、味噌、醤油」の俗諺（山谷は黄庭堅の号）が起こるほどに珍重されたことがよく知られている。しかし、そもそも黄庭堅の詩歌の特色とはいったいどのようなものだと言えるのか、北宋詩の双璧の一方をなす蘇東坡との違いはいったい那辺に存するのか、などといった本格的な研究は、現代の中国、そして日本の学会においてもいまだ十分な成果が提出されていないのが現状である。この学位請求論文は、この問題について、特に黄庭堅の詩歌の言語表現に着目して、およそ二つの視点から考察を展開し、さらに本編を六つの章段に分けて論述したものである。

まず第一に、黄庭堅の詩歌表現における特徴的な物に「双関語」が挙げられる。双関語とは、日本の詩歌における「掛け言葉」に近い表現形式で、中国の伝統詩文でも古くから存在するものであるが、宋代以前の用例としては、特に六朝時代の恋愛詩に顕著となったものである。「糸（sī）」が発音が同じ「思（sī）」を暗示し、「蓮（lián）」が「憐（lián）」、またその根（レンコン）を言う「藕（ǒu）」が一対の男女をいう「偶（ǒu）」を連想させるといった表現技巧は、礼教上タブー視され秘せられるべき男女の恋愛感情を、詩歌という公的な芸術表現の場に導き出すことを可能にした。しかし、黄庭堅の詩歌において積極的に用いられた双関語としては、中国南方の土着の民歌「竹枝詞」に学んだ禽言（鳥の鳴き声）詩や漢方の生薬の品種名を用いた薬名詩が注目される。中央政界の激しい政治闘争に巻き込まれ、中国南方の辺地に幾度も左遷された黄庭堅の後半生に思いを致せば、ホトトギスの鳴き声「不如帰」を文字通り「帰るに如かず（京に帰りたい）」の意に重ね合わせたり、セリ科の植物の根で血行改善や鎮痛剤に用いられる「当帰」を「まさに帰るべし」の意に読み替えたり、不眠や咳止め、また精神安定に効能があるヒメハギ科の植物の根「遠志（オンジ）」を「俗世を遠く離れる」意に用いるなどの用例は、単純な言語遊戯の範疇を脱し、左遷の苦悶や不安、そして身体の病衰や老いに対する深刻な悩みなどを、やさしく包み込み、詠歌全体の内容を軽く暢やかなものに変化させる効果をもつものであろう。また、薬名詩における数十種類の生薬名の連続は、宋代以降の知識人たちに共通して見られる博物学的好奇心を刺激し、この時代ならではの新しい創作技巧を導くものと言えるだろう。以上、双関語についての分析が本編の前

半第一章から第三章までの論述である。

後半の第四章からは、従前より黄庭堅の文学において重要視されてきた「禅」との関わりについての考察を展開してゆく。まず、黄庭堅の禅学修養において大きな啓示を与えた書籍として、『景徳伝灯録』の流布が指摘できる。現在、同署の最も古い印刷本（福建・東禅寺本、元豊三年刊＝１０８０年刊）が存在するが、黄庭堅はその頃より自ら『景徳伝灯録』の興味深い章節を書き写し、友人や後輩文人たちに与えている。また、自身の詩作にも積極的にこの『景徳伝灯録』由来の表現や警策となるべき印象的な故事を取り入れている。次に、黄庭堅の禅学理解を知る上での重要な分析指標として、題画詩（絵画作品に書き込まれた詩歌、および絵画を鑑賞した際に詠まれた作品）に注目したが、中でも「枯木図」と「風雨竹図」についてのものは、彼の生涯（初期＝熙寧・元豊年間、中期＝元祐年間、晩年期＝紹聖年間以降）を逐って、彼の人生観の変化および思索の深まりを見て取ることができる。唐以前の枯木や風雨竹（風雨や雪によって折れ破れた竹）は、逆境を耐え忍ぶ孤独な存在（すなわちそれを目にしている作者自身）の投影であることが一般的な傾向であったが、晩年、特に四川省南部の戎州左遷以降の黄庭堅はその絵画の中の現実をありのまま平心に受け入れ、またその絵画自体が仏教的な意味での仮（虚仮）のものであるとして、画面に「幻出」（注：仏典等から導き出された黄庭堅特有の用語と判断される）された枯れ木や折れた竹に心乱されることのない穏やかな精神世界を詩歌に詠もうとした。

これら黄庭堅詩の言語表現の特徴は、冒頭に述べたように後世の江西詩派の各詩人たちの作品に、そして日本の五山僧の詩歌にも確かに受け継がれているものであり、やがて、近世日本文芸に言われる「わび・さび」や「かるみ」にも通じるものがあるように考えられるのである。